

読み次第で 味わいが変わる 『論語』の正体。

人と人との間に自然に芽生える温かい心こそが「仁」。
『論語』は徹頭徹尾、人間について書かれている。



加藤 徹

かとう とつおる 明治大学教授

一九六三年、東京都生まれ。東京大学文学部、同大学院で中国文学を専攻。二〇〇二年、『京劇——「政治の国」の俳優群像』でサントリー学芸賞を受賞。著書に『西太后』『貝と羊の中国人』『漢文力』『本当は危ない「論語」』、共著に『日中戦後外交秘史』など。

“古拙”故の 多様な解釈

『論語』というと、およそ二五〇〇年前、中国の春秋時代の思想家・孔子が著したありがたい“お説教”の本というイメージをもたれている人もいるのではないのでしょうか。しかし実際には、孔子の自著ではなく、孔子の何代も後の弟子が、断片的に伝承されていた孔子と当時の弟子の言行を書き留めたものです。

『論語』がいつ成立したのかについては諸説ありますが、紀元前であることは間違いないでしょう。いわば後世に成立した「二次資料」という位置づけであり、孔子が実際に筆を執ったと信じられていた『春秋』など他の儒教の経典と比べて歴史的な評価は高くありませんでした。

そんな『論語』は、『孟子』『老子』など他の漢文古典の中でも“古

拙性”が際立っています。「古拙」とは、読んで字のごとく「古めかし、技巧的に拙い」という意味です。悪く言えば出来が悪いということですが、良く言えば素朴で味わい深い。この古拙性こそが『論語』の最大の特徴であり、今なお読み継がれる魅力の源泉だと私は考えています。

では、『論語』のどこが拙いのでしょうか。それについては、大きく二つのことが言えます。一つは、「誰が」「いつ」「どこで」「何を」「なぜ」「どのように」といった「5W1H」が不完全な点です。そしてもう一つは、形容詞や疑問符が存在しないという点です。

具体例を挙げましょう。『論語』の「雍也第六」に収録されているエピソードです。伯牛という弟子が病気になる、孔子が見舞いに行きました。しかし、孔子は伯牛の顔を直接

は見ず、窓越しにその手を握って、次の有名な言葉を言います。

〈原文〉

「亡之、命矣夫、斯人也而有斯疾也、斯人也而有斯疾也」

〈読み下し〉

「これを亡ぼせり、命なるかな。斯の人にして斯の疾あること、斯の人にして斯の疾あること」

〈現代語訳〉

「おしまいだ。運命だねえ。こんな人でもこんな病気になるうとは、こんな人でもこんな病気になるうとは」

(岩波文庫／金谷治訳注)

伯牛を見舞った孔子のエピソードは、これだけしか書かれていません。孔子が何歳で伯牛が何歳のときの話だったのか。伯牛はどんな人物だったのか。伯牛はどんな病気にかかっていたのか。窓とはどんな窓だったのか。「5W1H」は不完全

で、形容詞も見当たりません。

『論語』が成立した時代には、まだ紙が存在しておらず、文字は竹簡に書かれていました。竹簡は貴重なので、合理的に考えれば、なるべく文字数を抑えるべきです。にも拘わらず、伯牛のエピソードでは「斯人也而有斯疾也」の部分が繰り返されている。これもまた、古拙性の表れと言えるはずですよ。

さらに、ある学者は「亡ぼせり」という読み下しは、不自然だと考えます。病人に対して、面と向かって「おしまいだ」とはさすがに言わないだろうと。その学者に言わせれば、疑問符を付けて「おしまいだ？」とすれば、話に筋が通ると考えるわけですよ。他にも、どこで文章を区切るかによって意味が変わってしまう箇所などが随所にあります。『論語』は他の漢文古典と比較しても語彙も少なく、文法も単純なためかえって

分かりづらく、様々な解釈ができてしまうのです。

一般の読者には訳注のない『論語』の原文を読むことは困難なため、現代人は後世の学者らの注釈や現代語訳などのフィルターを通したいわば“加工品”の『論語』を読んでいることは頭に入れておいたほうがよいでしょう。ここで、私たち現代人は、ある思い込みを捨てなければなりません。それは『論語』は本である」という思い込みです。

現在の日本人は、近代以降のヨーロッパ的な本の読み方こそ、一般的な読書の方法だと認識しています。それは、一冊の本を読めばそこに書かれていることはすべて理解できる“自己完結型”の本でなければ成り立たない読み方です。

一方、近代化以前の東洋人は、理屈で本を読むのではなく、素読を大切にしていました。意味を考えずに

音読したものが、血となり、肉となり、それが後年、何かしらの体験を機にふと蘇ってくる。東洋人は、それこそが自分にとってのベストの解釈だと考えていたのです。正しい解釈が一つとは限りません。また、『論語』は自分一人で読書にふけるというよりは、解説してくれる学者とセットで学ぶものでもありました。武士に『論語』などの漢籍を推奨した徳川家康も林羅山などの学者から講義を受けています。

『論語』は、例えるならば“寸劇のシナリオ集”や“サイレント映画のフィルム”のようなもの。舞台演劇の役者がその日の気分で演技方を変えるように、活動弁士がお客さんの年齢によって言葉遣いを変えるように、訳注者によって多様な解釈が可能な書物なのです。だからこそ、江戸時代に私塾や寺子屋などで武士のために読むことも、農民・町人のた

めに読むこともできた。古拙であるが故に、『論語』はいつの時代にも色々な読み方ができるのです。

先の伯牛の病にまつわる短い一幕も、時代や読み手の置かれている状況によって、様々な形で心の中で再現できる。さらに言えば、人生経験が豊富な人であればあるほど、しみじみと豊かに再現できるでしょう。

「世間のことは世間で解決する」

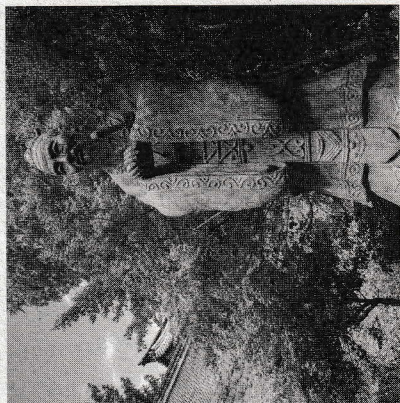
新一万円札の肖像に選ばれたことで、渋沢栄一に再び注目が集まっています。その渋沢の著書『論語と算盤』は、現在でもビジネスマンをはじめ愛読者が数多くいます。

渋沢は『論語』を“石のスープ”として最大限に活用した人物だと、私は考えています。“石のスープ”とは、ポルトガルに伝わる民話のことで、そのストーリーから転じて

「人々の協力を仰ぐための触媒」との意味で使われている言葉です。

渋沢栄一は、江戸時代末期に生まれ、幕末・明治・大正・昭和と四つの時代を生きました。さらに、出身は豪農であるものの、若い頃には武士の世界も垣間見て、そして官僚を経た後に実業界で成功した人です。また、海外にも頻繁に出かけています。つまり、激動の時代にあらゆる階層の人々を見てきた人物と言えます。

そんな渋沢は、幼少の頃から『論



東京都文京区、湯島聖堂内の孔子像 ©アフロ

語』を素読し、晩年に『論語と算盤』を著しました。士魂（武士的精神）の象徴である『論語』と商才の象徴である算盤は相矛盾するものではなく、士魂も商才も、道徳の書である『論語』によって養えると、近代化にひたはしる日本人に向けて提唱しました。

少なくとも明治時代には、『論語』は国民的書物であり、多くの国民にとって『論語』を暗記することは一般的なことだったそうです。そうした時代背景もあり、渋沢は実に巧みに『論語』を“石のスープ”として活用できたのです。

このことを換言すれば、『論語』の有名な言葉である「温故而知新」とも言えます。すなわち、渋沢は「古きを温めて新しきを知る」ことに長けていたのです。渋沢は決して、『論語』そのものに回答を求めたわけではありません。人はしばし

ば、「古いものを温める」というと、古いものを抱きしめてしまい、自分も一緒に化石化してしまう。しかし、渋沢は古いもの＝『論語』を上手に温めました。そして、『論語』を触媒にして、新たな時代を切り開いたのです。

『論語』を“石のスープ”にできるのは、ともすれば学者よりもむしろ渋沢栄一のような人だと思えます。つまり、社会の荒波に揉まれながらも前向きに生きている人、本気で生きている人ほど、『論語』を自らの血肉にできるのではないのでしょうか。

さて、『論語と算盤』のみならず、『論語』自体もビジネスマンの教養として読み継がれています。その理由としてどのようなことが考えられるのでしょうか。

まず『論語』には、「学問」の重要性が説かれています。それは単に先生から教えてもらう「学び」だけ

でなく自ら「問う」ことが重要であるとしています。過去の英知を学ぶだけでなく、得た知識を通してどうすればより良くなるかを問うこと。

こうした考え方は、先行きの見えないう時代を生きる現代のビジネスマンにも受け入れられやすいはずです。

また、孔子は王様でもなければ肉体労働者でもなく、現代で言うところの中間管理職に当たる士大夫の身分でした。彼らは「自分たちが世の中を引っ張らなければ、誰が世の中を動かしていくのか」といった矜持や美意識をもっていたと思います。これもまた、現代のビジネスマンに通じるところがあるのではないのでしょうか。

極めつけは、『論語』が示す「世間のことは世間で解決する」という姿勢です。例えば、人間関係で嫌なことがあったとしても、世捨て人になるのではなく、人間に生まれたか

らには、人間とともに生きていくよりほかあるまいというのが孔子の考え方です。簡単には世捨て人になることができないビジネスマンに共感を生むのかもしれませんが。

孔子が変えた「師弟関係」の意味

中国において、孔子以前と孔子以後で、決定的に変わったことがあります。それは「師弟関係」の意味付けです。孔子以前の中国社会では、師弟関係よりも、血縁や地縁のほうが圧倒的に重要でした。しかし、孔子やその弟子たちは、たとえ血筋が繋がっていなくとも、人間の心や思いを受け継ぐことは可能だと考えました。『論語』のなかに次のような言葉があります。

〈原文〉

「與人恭而有禮、四海之内、皆爲兄弟也」

〈読み下し〉

「人と恭々しくして礼あらば、四海の内は皆を兄弟たり」

〈現代語訳〉

「人と交わるのにていねいにして礼を守ってゆけば、世界じゅうの人はみな兄弟になる」

(同)

人は、自分が生まれる国や地域、あるいは親を選ぶことはできませんが、師匠であれば自らの意志で選ぶことができます。ゆえに、孔子一門の師弟関係は強固であり、弟子たちはみな強い連帯感をもったのです。

孔子一門は、いわば「志縁集団」でした。こうした師弟観は、二五〇〇年前には極めて進歩的な思想だったと言えます。それが、今となつては、東洋社会にしっかりと根付いているのです。

一人の人間の寿命は限られていますが、師弟関係によって志や思想、信

念、思いは、世界中に広げることができる。現代社会においても、孔子が大きな影響力をもっていること自体が、その何よりの証左でしょう。

孔子はまた、乱世においては「正論」こそが、矛や甲冑に勝る武器になることを熟知していました。孔子の主張には、その時代の「正論」が多分に含まれているのです。例えば、親孝行や先祖を尊敬することの重要性、あるいは天子は偉いといった考えです。これだけを聞くと、や

やもすれば理想主義者に見えるかもしれませんが、そうではありません。むしろ、極めて戦略的に社会の正論を自己の主張として援用したのだと思います。

孔子以外に正論を熟知していた歴史上の人物に、インドのマハトマ・ガンジーがいます。イギリスからの独立運動を進める上で、ガンジーが掲げたのは非暴力と不服従でした。つまり、イギリスの民主主義における正論を用いたのです。

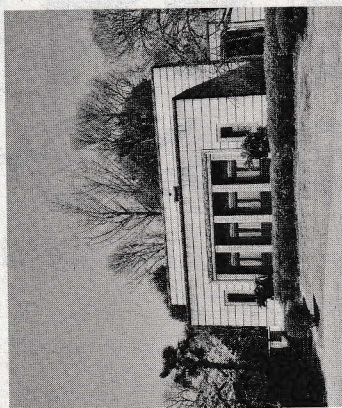
イギリス側から見れば、暴力やテロを起こしてもらったほうがやりやすかったはずですが。なぜなら、それは正論ではなく曲論であり、制圧してしまえばよいからです。だからこそ、ガンジーは正論を掲げたのです。

正論を唱え続けた人物には、他に諸葛孔明がいます。彼の場合は、目の先の戦争に勝てなくとも、正論を唱

え続けました。それが、現代においても英雄として人々の心をつかみ続けている理由だと思います。

『論語』は徹頭徹尾、人間について書かれた書物です。孔子は「仁」を大切にしました。「二人」の「人」のあいだに自然に芽生える温かい心こそが「仁」なのです。日常的な人間関係に正面から向き合うこと。そして、自分にできることからやっていくこと。『論語』には、そうした考えが、決して上から目線ではなく、弟子から見た孔子のキャラクターを通して述べられているのです。

孔子は入門料として乾肉の束をもつてきた者は誰でも受け入れて教えました。現代においても、誰かに叱つてほしいとき、慰めてほしいとき、励ましてほしいとき、先輩の胸を借りるような思いで『論語』のページをめくると、必ず相応の言葉が見つかるはずです。



東京都北区、浅沢史料館内にある書庫。浅沢栄一の書庫として、かつては『論語』など多くの漢籍が収蔵されていた。©アフロ